国際日本学研究科

修士学位請求論文要旨

〔論文題名〕

外来語における形容動詞と名詞の連続性

―用法に基づくグラデーションの可視化―

国際日本学研究科　博士前期課程	
国際日本学　　専攻	
日本語学・日本語教育学　　研究領域	
入学年度	２０２３　年度
学生番号	４９１１２３４００２
氏　名	馮　瑞閣
指導教員	田中　牧郎
提　出　日	２０２５年　１月９日

本研究の目的

本論では、学校文法における「形容動詞」と「名詞」の２つの品詞を対象とし、特にその両方として使用可能な語に見られる「品詞的な連続性」という現象について検討する。具体的には、形容動詞と名詞の両方として用いられる語を、その用法の実態に基づいて類型化し、形容動詞として「典型的」か「周辺的」かといった視点で語の性質を考えるものである。そして本研究の第一の目的は、連続性を持つ語の品詞の性質、ないし同じく連続性を持つ語同士の相対的な品詞の性質を把握し目に見える形にすることである。また、形容動詞と名詞の間に連続性が生じる要因を明らかにすることである。

従来の研究

これまでの「品詞的な連続性」に関する研究では、複数の品詞として同時に用いられる語の特殊性が共通の背景として窺える。このような語では、形容詞的か名詞的かを判断することが難しく、その品詞の判別が主要な課題となっていた。研究の中心的な議論は品詞の類型化にあり、今現在、学校文法においては「形容動詞」が「名詞」と区別される形で定着している。一方で、「状名詞」「ナ形容詞」「ノ形容詞」「名詞ナ形容詞」など、さまざまな視点から品詞を捉える試みもなされてきた。また辞書などでは、品詞の判断が難しい語について、あえて品詞に触れずに用法で区別する手法が取られることもあった。その点で、「品詞的な連続性」への捉え方は様々であると言える。

しかし、これらの研究や調査の共通目的は、語の品詞を一つに帰結させることと語を分類することに主眼を置いており、形容動詞と名詞とを一つの連続する軸として捉えられず、「品詞的な連続性」が生じる理由を探るには至っていない。そして特に、外来語に関しては従来の研究で十分に取り上げられておらず、形容動詞と名詞とを一つ連続する軸の視点から捉えてもいない。このような状況の中で、「品詞的な連続性」がどのような場面で、なぜ生じるのかという根本的な問題は依然として未解明のままである。

以上をことについて、次に通りに、各章の内容と研究の結果、今後の課題について述べる。

本論の概要

第一章では研究の背景から研究の動機と関心を述べたのち、研究の目的を明らかにした。また、大量の言語データを扱う現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いることの重要性も唱えた。

第二章では、先行研究を整理し、そこから導き出された本研究の課題と独自の用語の定義を明確にした。品詞的な連続性を持つ語は、数的に膨大であり、使用される場面や文脈によって品詞が異なるため、その性質が形容動詞に近いか名詞に近いかを一概に捉えることは困難である。このような状況を踏まえ、本研究では、形容動詞と名詞を連続する一つの軸として捉える視点を採用した。この軸上では、語によって品詞的性質が形容動詞または名詞に

偏ることがあり、これらの語全体が形容動詞と名詞の間で「グラデーション」を形成していると予想し、それを可視化させる必要性を述べた。この「グラデーション」を必要とした最も重要な理由は、語と語の相対的な品詞の性質を明らかにできるためであると強調した。

第三章では、本研究の方法論について論じた。調査対象として、現代日本語の実態をより代表する「新聞」「雑誌」「書籍」の 3 つのレジスターに絞り込み、それらから外来語を特定した。用例分析に際しては、形容動詞と名詞の用法を明確に捉える立場を設定した上で、用法を分類した。具体的には、形容動詞視点で「典型的」な用法とそれ以外の用法を区別し、これを「連続性の区切り」と名付けた。さらに、「典型的」「やや典型的」「やや周辺的」「周辺的」の 4 分類を作成し、これらを基に「品詞的な連続性」を持つ語を用法の観点から類型化した。この分類の目的は、語ごとの具体的な用法を明らかにし、語と語の相対的な品詞の性質を把握できる「グラデーション」の可視化に先立つ準備を整えることであった。また、BCCWJ コーパスを用いて、調査対象の語がそれぞれの用法に属する頻度を「特徴率」として数値化し、このデータを基に「グラデーション」を目に見える形にする方法ついて述べた。

第四章では、語と語の相対的な品詞の性質を明らかにし、目に見える形にした品詞の連続性の「グラデーション」について述べた。従来、「形容動詞であり名詞でもある」というように大まかに扱われてきた「品詞的な連続性」を持つ語については、その実、同様に連続性を持つ語であっても、互いに品詞の性質が異なることであることがはっきりとなっている。具体的には、「ネガティブ」や「ナチュラル」などは形容動詞としての性質が強く、「オリジナル」や「リアルタイム」などは形容動詞と名詞の中間的な性質を持つ語であることが確認された。一方で、「ブルー」や「グレー」などは名詞としての性質が強く、形容動詞としても使用されるものの、上記の語とは用法が異なることが明らかになった。このように、グラデーションを用いることで、語ごとの品詞の性質の差異がはっきりとなった。

第五章では、これまででは成果の薄い部分とも言える品詞的な連続性が生じる理由について逐語に考察し、大きく 9 つの要素が品詞の変化と関連していることを明らかにした。異なる意味で用いられるために品詞が形容動詞か名詞に変わることが一般的で、一部の語に関しては特定の分野での使用でしか品詞が変化しないと見た。例えば、「ストレート」や「デジタル」などはこれに当たり、それぞれ野球と電子機器を言う場面で名詞に変わるものである。また、このような特定分野での使用とも関連するように、「デジタル」という語に品詞的な連続性が観察されたのは語源による問題であると考えられる。つまり、形容動詞「デジタル」とは別で「デジタルカメラ」を省略した名詞「デジタル」もあり、両者が同じく「デジタル」と書かれる点で形容動詞と名詞の両方の性質を有する語として「デジタル」がヒットされた。また他にも列挙や対象などの場面で元々形容動詞の語を名詞化させることにより品詞が変化することや、サ変動詞の性質を持つ語の語幹が名詞化する傾向などを確認した。これらの要素が重なり合って、その結果として現れたのが品詞的な連続性と考えられる。

第六章では、これまでの議論を総括し、「品詞的な連続性」についての本研究の見解を述

べた。結論として、「品詞的な連続性」とは、語に見られる語源や意味、用法、表記などのさまざまな要因により発生する現象であることを明らかにした。また、形容動詞と名詞の間で連続性を持つ語であっても、互いに性質が異なることが示された。この点を「グラデーション」を用いて可視化した。本研究で提唱した「グラデーション」の概念は、形容動詞と名詞を一つの連続的な軸として捉えることに基づいている。従来の「品詞的な連続性」に関する研究では、語の品詞判断に強くこだわり、結果として新たな品詞の分類が次々に提案され、品詞の過度な分化が進んできた。しかし、本研究では、品詞判断が必要であることを認めつつも、語の性質を形容動詞か名詞のいずれかに単純に決めつけるのではなく、語によっては形容動詞的または名詞的な性質が異なる程度で存在し、実態として品詞そのものが流動的であることを示した。

結論と課題

本研究は品詞的な連続性を持つ外来語を取り上げ、それをその用法の実態に基づいて類型化した。形容動詞として「典型的」な語もあれば、そうでない「周辺的」な語もあり、語ごとに品詞の性質が異なることを明らかにした。また、品詞的な連続性を持つ複数の語を比較する場合の互いの相対的な品詞の性質も明らかにした。調査対象の連続性を持つ語をその最も性質の近い品詞に置くようにそれぞれ並べ替えた結果、２９語は全体的にやや名詞性の強いグラデーションとして現れた。最後に、本研究は品詞的な連続性が生じる理由を一部明らかにし、大まかに９つの要素を把握した。

今後の研究に関しては、進める方向は大きく２つである。第一に語彙（語源、意味）の視点から品詞的な連続性が生じる理由を具体的に把握することである。第二に、調査範囲をより現代に絞り込んで平年代の外来語を取り扱い、厳密に砕けた場面・改まった場面を分け、そこでの外来語の品詞的な連続性の実態を明らかにすることである。